

# 石井鶴三と長野県美術教育の関係について

大 島 賢 一 （信州大学教育学部）

## 1 はじめに

「私の生涯の前半は山岳により、後半は芸術教育により長野県とは深い縁が結ばれたわけで、長野県人と思われてもしかたがないと思う」<sup>1</sup>。これは石井鶴三(1887-1973)が、『信濃教育』1000号記念号に寄せた「山岳と芸術教育」と題されたエッセーの末文である。ここにも読み取れるように、石井鶴三と長野県の関係について考える際に、芸術教育の分野における貢献を無視することはできない。石井は1944年より東京美術学校(のち東京藝術大学)の教授となり、高等教育機関における芸術教育に従事し後進の指導にも努めたが、信州の地では、教員向け講習会や講演会などを通じて、初等、中等の芸術教育にも多大な影響を与えている。そうした石井の長野県美術教育への影響を裏付けるように、信州大学に収蔵された資料の中には、長野県美術教育関係者に関わるものが多く見られる。これらの美術教育関係の資料を整理し、位置付けることは、石井鶴三というマルチな活躍を見せた人物のプロフィールを明らかにすることに貢献するとともに、長野における美術教育史の一側面を明らかにすることに繋がると考えられる。

筆者は、2013年度より、石井鶴三関連資料の整理に美術教育史的観点から携わっており、2014年度以降は、「自由画教育運動を契機とした美術教育の地域的展開—石井鶴三関連資料の整理・分析」と題した科学研究費課題に取り組んでいる。

本稿では上記の研究課題の一端として、石井鶴三と長野県美術教育との関わりについての概要をしめし、ついで先行研究を検討し石井鶴三の美術教育史的な位置付けを確認した後に、今後の整理、研究の展望を示す。

## 2 石井鶴三と長野県美術教育の関わり

石井鶴三と長野県美術教育との関わりの概要については、『信州大学附属図書館研究』第1号掲載の「石井鶴三関連資料の整理について」<sup>2</sup>にすでに記載があるので繰り返しとなる部分もあるが、幾つかのトピックに整理して以下に示す。

### 1、自由画教育運動との関わり

石井鶴三が美術教育に関わりを持ち始めたのは、山本鼎(1882-1946)との関係による。

版画家、洋画家として知られる山本鼎は、日本近代美術教育史の文脈においては、自由画運動を発起、奨励した人物として位置付けられる<sup>3</sup>。山本は、鶴三の兄である石井柏亭(1882-1958)と親交があり、

東京美術学校在学時には石井家と同居するなどしており、鶴三とも交友関係にあった。石井鶴三と長野県をつなぐ「山岳」の部分においても、最初の浅間山登山に帯同したのは山本であった。

山本鼎は、1912年から1916年にかけて欧州遊学をする。その帰路、革命直前のロシアに5ヶ月間滞在し、児童画の展覧会と農民美術の展覧会を見た<sup>4</sup>。それらに刺激を受けた山本は、父が医院を開業するために移り住んだ長野県上田の地で、金井正(1886-1955)や山越脩蔵(1894-1990)ら地元の青年の協力を得、自由画教育運動と農民美術運動を起す。

自由画教育運動について、「自由畫教育の要點」<sup>5</sup>と題された山本のエッセーによってまとめると次のようになる。山本は、「普通學に位置する従来の図画教育」を、「大人が習慣的な傲慢から、平気で作り上げた」「干からびたお手本」の模写によって子供達の創造的種子を押しつぶしてしまう営みであり、「不自由画」であると批判する。そして、子供には唯一のお手本として「自然」を与え、それ以外の手本によらず「自由」に描かせることによって、図画教育が真に美術教育になり得るのだと主張する。自由画教育は、物体を正確に写すことや、必要に応じて物の形が描ける事ではなく、美的感銘、創造的能力を開発涵養するのであり、専門的な描画技能の養成に向かうような「美術家教育」ではなく、「創造的情熱ある人間らしい中学生」としての人間を作り出すための教育なのだとする。

山本のこうした主張は、今日の初等中等教育において、一般教育として「美的情操」の涵養を教育目的として掲げる図画／美術教育のあり方に通じるものであり、日本における近代的美術教育思想の嚆矢とすることができる。

自由画教育運動は1918年に上田の神川小学校で行われた山本鼎の講演「児童の絵画教育に就て」を皮切りに、翌年の同小学校での児童画展覧会の開催、日本児童自由画協会(1920年に日本自由教育協会に改称)の結成、東京や大阪など日本各地での児童画展覧会の開催、講演や雑誌でのキャンペーンなどを経て、1921年に『芸術自由教育』という機関誌の発行を行うに至る。しかしこの雑誌は、資金や編集委員間の問題から10号で廃刊となり、以降山本は自由画教育運動の一線から退いていくようになる。

山本は、自由画教育運動を、芸術家を含む多くの友人たちを巻き込みながら実施していった。その中でも石井鶴三は、創立時から児童自由画協会の会員となるなど、自由画教育運動に深く関与した。1920年に兜屋画堂を会場として行われた東京での児童画展では、所蔵していた妹・石井幸子の絵を展示し、ついで東京日々新聞が協賛となった全国規模の児童画展覧会では、山本鼎、長原孝太郎、坂本繁二郎、平福百穂、岸辺福雄とともに審査員を務めている。また、講演や雑誌での論争などに忙殺されている山本に代わり、地方での児童画展に直接関わることもあったようだ<sup>6</sup>。また山本鼎が自由学園の美術教師となった時には、山本の推薦によって、石井鶴三も同校に採用されている。

このように、石井は日本近代美術史上のターニングポイントとなる自由画教育運動に直接関与していた。長野を中心として始まった自由画教育運動だが、山本の尽力により瞬間に全国的なものとなる。そうしたなかで徐々に長野から離れていく山本に対して、石井はその後も永きにわたって、長野に関わり続ける事となる。

## 2、上田彫塑講習会との関わり

1926年の小学校令の改正に伴い、それまでは加設科目とされていた手工科が、高等小学校の必修教科となる。この必修化に備えるために、1924年に小県上田教育会は、「粘土の講習会」を企画する。この講習会の開催にあたり、中心となって尽力したのが、後に上田彫塑研究会の初代会長となる小林三郎(1892-1970)と、当時、小林の勤務校であった上田尋常高等小学校南校の部長であり、上小教育会の役員であった長坂利朗(1887-1943)である。

小林三郎は、1922年より上田にアトリエを構えていた倉田白羊(1881-1938)と、「ノアの会」という絵画の研究会を組織しており、その縁から倉田に講習会の講師の選定を相談する。その倉田から推薦されたのが、石井鶴三であった。

文展の入選作も持ち、画壇からも注目され中堅画家の位置を確たるものとしつつあった倉田白羊が上田の地にいたのは、『方寸』、「パンの会」などで関わりがあった山本鼎の招請による。山本は、児童自由画運動と並行して、農民美術の運動も行っていたが、その拠点として農民美術研究所を設立し、その副所長として倉田を上田の地に招いたのである。倉田にとって長野の農村への移住は、ヨーロッパの近代の画家たちが、郊外の農村へと居を移し、自然や農村を描くということへの憧憬におされたものでもあったことは想像に難くない。彼の地で倉田は農村や自然の景観を主題とした多くの絵を制作している。また、先述のように、小林三郎ら当地で絵画を制作している若者たちとも交流していた。小林の回想<sup>7</sup>によると、講師選定の依頼を受けた白羊は、即座に「鶴三がいいでしょう。僕が紹介状を書きましょう」と熱心に鶴三を推薦したという。

かくして、1924年8月6日から10日までの5日間、石井鶴三を招き、彫塑講習会が実施される。第一回目の講習会は、小県上田教育会が主催したため、管内地域の各小学校より1名ずつ参加することとされ、37名の参加者によって開催された。

この講習会は、もともと手工教育のための「粘土の講習会」として企画されたものであったが、石井はもとより「彫刻の勉強」をするものとして引き受け、さらには、当時参加していた日本美術院の院則「日本美術院は自由研究を主とす。故に教師なし、先輩あり、教習なし、研究あり」を掲げ、美術院の研究所を上田へうつすという心持ちで行うとして、実際にモデルを置いて各自が自主制作するという本格的な塑造制作という講習方法が取られた。このような石井の講習会は、粘土の講習会を期待した多くの教員には不評であり、教育会の方でも「本格的に過ぎる」として、その意義が理解されなかった。その結果、教育会が主催となって講習会を行ったのは、この年のみとなった。しかし石井は後年「やるからには本格でなければならぬ。いい加減にやるなら害があるからやらない方がいい。真剣にやるという人が一人でもあれば私は一緒にやるというのが私の持論」<sup>8</sup>であったと回想しているように、翌年からは、石井の姿勢に感銘を受けた小林三郎を始めとする有志によって上小彫塑研究会(1961年に上田彫塑研究会と改称)が組織され、初年度と同様のスタイルの彫塑の講習会が継続して実施されることとなる。石井鶴三は、戦争の影響で開催されなかった1945年を除き、1970年までの半世紀近く、毎夏上田の地を訪れ、この講習会に講師として関わり続けることとなる。

石井と研究会のメンバーは長きにわたり非常に緊密な関係を持ち続けた。研究会のメンバーは石井が出席していた院展への見学旅行を企画し、中心人物たちの中には、東京藝術大学の石井教室で長期研修

を行うものや、院展に出品し入選するもの、美術院の研究生となるものが現れるなどした。会員たちにとって彫塑研究会と石井鶴三の存在は、単なる年一回の教育技術向上のための実技講習の場とその講師という以上の意味を持つものであった。それは彼らにとって芸術というものへの窓口であり、石井を中心とした教員たちによる継続的な芸術サークルが形成されていたと見ることができる。そして、長年にわたる講習会の中で様々な研鑽を積み、芸術への理解を深めた多くの教師たちが、その後の長野県の実術教育を主導している。

### 3、木曾、長野などでの短期間の講師・講演、教育会誌への貢献

石井が最も長く深く関わった長野の実術教育活動は、前述の上田彫塑講習会だが、この講習会で石井の薫陶を受けた教師たちが指導的な立場となり、また石井の評判、講習の意図が理解されるに従い、上田のほかでも、様々な講習会の講師として、また、講演者として、長野各地の教育会に招かれるようになる。以下に石井が関わった長野県の実術講習会、講演等について、『石井鶴三日記』<sup>9</sup>『石井鶴三全集』<sup>10</sup>などの資料を参考にしながら、年代順に示す。

#### 講習会講師等

- 1928-1931年 伊那彫塑講習会(伊那町)
- 1933-1935年 長野彫塑講習会(長野市)
- 1937-1958年 長野絵画講習会(長野市)
- 1942年 木曾学童図画展にて児童画作品批評及び図画教育指導(木曾)
- 1952年 木曾教育会図画工作認定講習会講師(木曾)

#### 講演／寄稿

- 1949年 講演「彫刻性」 上小彫塑研究会彫刻研究25年記念講演
- 1953年 寄稿「萩原碌山の彫刻について」『信濃教育』 昭和28年2月号
- 1954年 講演「彫刻の話」 上小彫塑研究会彫塑研究30年記念講演
- 1954年 寄稿「良寛、虎、山ずみ」『上田彫塑研究会満三十周年記念誌』
- 1964年 講演「私の彫刻修行」 上田彫塑研究会彫塑研究40年記念講演
- 1964年 講演「我古と乾也」 長野県小学校長研究協議会上田大会
- 1970年 寄稿「山岳と芸術教育」『信濃教育』 昭和45年3月号 1000号記念号

また、石井は、1954年に東京藝術大学石井研究室編として、『彫刻家萩原碌山』<sup>11</sup>を信濃教育会より出版している。そのほかにも、木曾教育会誌の『木曾教育』(1950-)、上小教育会誌の『上小教育』(1954-)は、その創刊から表紙の絵と題字の揮毫を手がけ、信濃教育会誌の『信濃教育』の表紙と題字も昭和28年の第793号から石井によるものとなっている。石井の逝去により、それぞれの雑誌は追悼特集号を組んでいる。特に『信濃教育』第1044号は180ページを超えて、生前の石井を知る関係者からの評伝、追悼文などが寄せられている。

これらを見るに、長野県教育における石井鶴三の影響というのが、相当に大きなものであったことがうかがえる。それは単に彫塑、美術という領域だけではなく、教育全般に根を張っているように考えら

れる。

### 3 石井鶴三の美術教育史上における位置付け

ここでは、美術教育史の文脈において、石井鶴三について論じた研究を整理し、現在の美術教育史上の石井の位置について明らかにしておく。

山本鼎と自由画教育運動についての様々な研究の積み上げに対して、彫塑や工芸など大正期の立体美術教育についての研究というのは少ない。美術教育においては、絵画という領域が実践においても、歴史的検証の対象としても中心的な領域であり、工芸や立体はマージナルなものであったためだと考えられる。図画の教育は学制頒布当時から必修科目として設定されていたが、一方で、立体、工作内容を含む手工の教育は、明治19年になってようやく随意科目として取り上げられ、先述したように大正15年に必修科目とされる。また、その周縁性が、現在の教科のフレーミングからしてみると「美術科」と「技術科」の中間的な領域ということになることも影響していると考えられる<sup>12</sup>。

石井鶴三が当初手工科の必修化に伴う「粘土」の講習の講師として呼ばれたことからわかるように、初等中等教育における彫塑教育分野は、当初は芸術教育というよりも技術教育的色彩の強い、手工一技術の教育内容に位置付けられていた。学校教育の仕組みの中で粘土を扱うのは、手工教育の中で「粘土細工」のためとして扱われる他なかった<sup>13</sup>のである。そして、美術教育史研究において石井鶴三は、「粘土細工から彫塑教育へ」の転換点に位置づけられる。

梶田幸恵の「粘土細工から彫塑教育への転換—信州・上田彫塑研究会の活動—」<sup>14</sup>は、そのように石井の取り組みを美術教育史に位置付けた最初期のものである。梶田は粘土細工による教育を「手と目の訓練を目的」とするものであるとし、それに対し彫塑教育を「全く、新しく、美的感動の表現を中軸とする芸術教育」であるとする。石井が彫塑研究会で採用した指導方法は、前述のように実際にモデルを立てて彫塑を制作させるという芸術家育成のためのトレーニングに習ったものであり、粘土による模造のような方法をとらなかった。この実践をして梶田は、石井が初等・中等教育に、彫塑教育を持ち込んだ最初期の一人であるとし、粘土細工から彫塑教育の転換点にあるとするのである。東京美術学校においても模刻や「物形模造」による教育が一般的であった時代に、石井が教員の講習会にそのような方法を持ち込んだことについて、梶田は、「立体感動」と称する石井自身の立体造形哲学、兄白亭を中心とした様々な芸術家との関わりや交流から、彫塑以外の様々な文芸、芸術に触れていた芸術的素養、そして山本鼎を通して関わった自由画教育運動を通しての芸術教育への理解によるものであるとしている。

同様の見解は、奥西麻由子「粘土細工から彫塑教育への転換に関する歴史的研究—明治・大正・昭和初期の彫塑教育に焦点を当てて—」<sup>15</sup>にも見られる。奥西は、大正後期のロマン主義的教育の広がりの中で、芸術教育としての彫塑教育を取り上げようとした上原六四郎、岡山秀吉、霜田静志、横井曹一などの議論について検討し、石井鶴三の「彫塑講習会」を、それらの議論においてなされた美術教育としての彫塑教育としての実践を、教員研修の場でおこなった事例として取り上げる。奥西が指摘するように、石井が彫塑講習会を始めた大正後期には、先に挙げた人々によって、芸術教育としての「彫塑教育」の可

能性が提起されていた事実があり、石井のみが特別であったとする事は出来ない。しかし、石井の場合、教員たちによる講習会という実践へと結実している点は特筆されるべきだろう。

#### 4 石井鶴三と長野県の美術教育について—今後の資料整理と研究の展望

石井鶴三は、上述のように、これまでの美術教育史上においては、上田彫塑研究会を通して、芸術教育としての彫塑教育の礎を築いた人物として扱われている。しかし、それらの研究は、山本鼎の自由画教育という大正期の美術教育史の一大転機から、戦後、ごく最近まで彫塑講習会に関わり、一地域の具体的な教育に携わり続けた人物としての石井鶴三の美術教育思想や、具体的な影響について十分に検証し尽くしているとは言い難い。美術教育者石井鶴三という人物の全体像を明らかにすることは、石井鶴三という人物を通して、美術教育史を整理し直す試みとなり、長野県の美術教育の姿のみならず、日本近代の美術教育を立体的に照らし出すことへ繋がるものとなり得ると考えられる。以下に、今後の石井鶴三関係資料の整理を通してなされる調査・研究の展望を示す。

石井鶴三関連資料の中には、関わりがあった美術家からの書簡が多くある<sup>16</sup>が、その中には山本鼎からのものも含まれている。それら山本からの書簡の中には、自由画教育運動に直接関わるものも含まれている。具体的には、『芸術自由教育』へのカットの依頼や、審査の礼など【高田馬場1-130、高田馬場1-146、高田馬場1-272】や、農民美術運動への講師依頼、その後山本ともに勤める事となる東京池袋の自由学園へ講師として推薦したことの連絡【高田馬場1-131】などをみる事が出来る。

これら新出の資料を、これまでの自由画教育運動についての研究や、既出の石井鶴三関係の資料と突き合わせることによって、自由画教育運動に関わりながら、石井鶴三がどのように自らの美術教育観を形成していったかということが明らかとなるとともに、画家山本鼎によって図画教育の分野で進められた自由主義教育の展開である自由画教育運動が、彫刻家石井鶴三によって彫刻の分野へと発展されていったその過程が具体的に明らかとなるのではないだろうか。

石井鶴三関連資料の美術教育に関わる物の中で、量に置いて目を引くのは、やはり上田彫塑研究会関連の物である。その中には、すでに『石井鶴三全集』2巻において翻刻されており<sup>17</sup>、新出ではないが、倉田白羊から石井に認められた、第一回彫塑講習会の講師依頼状が含まれている【書簡3-129、書簡3-130】。これも既出であるが、彫塑講習会の世話人である小林三郎が、講習会前に石井に認めた書簡<sup>18</sup>も確認できる【書簡3-133、書簡3-138】。

さらに、彫塑講習会に関係して興味深い資料として、石井が講習を行うにあたり、受講生に「一、彫塑講習会についての御希望、御所感／二、これまで御覧になった絵画彫刻の中(作品)で、特に感銘を受けたものがおありでしたら、それについての御所感／三、御自作の絵を一二枚見せていただきたい」<sup>19</sup>というアンケートを行っており、これへの回答として認められた教師による書簡が十数通確認できる。こうした資料は、往時の学校教員の芸術に対する知識や理解をうかがえる点で興味深い。

また、差出人を小林三郎とする書簡は、戦前、戦中、戦後に渡って確認できる。長野県と深く長く関わった石井は、小林以外にも生涯にわたって関わりをもった人物が確認され、石井鶴三関係資料の中に

は、上田彫塑研究会を含む長野県美術教育関係者と思しき人物からの書簡が多く含まれている。石井と長野県の教師たちの間を往還したそのやりとりは、長期的な長野県的美術教育の状況をも語るものとなっており興味深い。これらの美術教育関係の書簡の整理を通して、長野県的美術教育に対する石井鶴三の具体的影響を明らかとすることが可能だろう。長野県という一地域において、石井鶴三という芸術家の思想や実践が、実際の教育の現場でどのように実施され、また他の教師たちへと影響し、長野県的美術教育思想を形成したかということ物語るものであると言え、さらには、自由画教育発祥の地である長野の、大正一昭和期的美術教育者たちの意識を探ることができるという点において、単なる一地域的美術教育史を超えて、日本の美術教育の一側面を物語る資料となり得ることが期待できる。

## 5 おわりに

山本による自由画教育運動は当初、長野県の地において、一部の教師たちに熱狂的に受け入れられると同時に、教育会などの権威からはその革新性に対する少なからぬ反発があったという。石井の彫塑講習会もまた、最初手工としての粘土細工の講習を想定していた教育関係者から、実情に合わぬものとして教員の講習として不適であるとされた。しかし、石井の略歴からもわかるように、彼らの活動は、徐々に教育会を中心としたオーソリティに受け入れられていく。これは、石井という人物と、その芸術教育が受け入れられる過程であると同時に、長野、そして日本における美術教育理解と実践の変容の過程として捉えることができるだろう。大正期にその萌芽を見せる「芸術教育思想」が、その後の長野、そして日本においてどのように根付き、受け入れられていったかということ、これらの資料から読み取ることができるのではないだろうか。

(本研究は平成26年度-28年度科学研究費補助金(若手研究(B))「自由画教育運動を契機とした美術教育の地域的展開—石井鶴三関連資料の整理・分析」課題番号26870238の助成を受けている。)

---

<sup>1</sup> 石井鶴三「山岳と芸術教育」『信濃教育』第1000号、1970年、p.21

<sup>2</sup> 笹本正治「石井鶴三関連資料の整理について」『信州大学附属図書館研究』第1号、2012年、pp.1-11

<sup>3</sup> 山本鼎の自由画教育運動とその研究については、上野浩道『芸術教育運動の研究』風間書房、1981年、金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治・大正時代』中央公論美術出版、1999年などに詳しい。

<sup>4</sup> 金子一夫、前掲書、p.350

<sup>5</sup> 山本鼎「自由画教育の要點」『自由画教育』アルス、1921年、pp.1-23

<sup>6</sup> 長野県の教員で、自由画教育運動に熱心に協力した木下紫水あての手紙のなかで、飯田市座光寺で開催される展覧会への協力を請われた山本が、自身の代理として石井鶴三を紹介していることが確認できる。山越脩蔵編『山本鼎の手紙』上田市教育委員会、1971年、p.184

<sup>7</sup> 小林三郎「信州と石井鶴三先生」上田彫塑研究会彫塑50年記念特別委員会編『石井鶴三先生—信州上田

と一』、小県上田教育会、1974年、pp.142-144

- <sup>8</sup> 石井鶴三「彫刻性(彫刻研究25年記念講演)」『石井鶴三先生—信州上田と一』 p.88
- <sup>9</sup> 『石井鶴三日記』全5巻、形文社、2005年
- <sup>10</sup> 『石井鶴三全集』全12巻+別巻2巻、形象社、1986-89年
- <sup>11</sup> 東京藝術大学石井研究室編『彫刻家萩原碌山』、信濃教育会、1954年
- <sup>12</sup> 明治期から大正期の手工教育の展開について、技術教育史研究として宮崎擴道『創始期の手工教育実践史』風間書房、2003年などがある。
- <sup>13</sup> 上野小策、梶田幸恵『粘土細工から彫塑教育へ』明治図書、1980年
- <sup>14</sup> 梶田幸恵「粘土細工から彫塑教育への転換—信州・上田彫塑研究会の活動—」『大学美術教育学会』第19巻、1987年、pp.27-38.
- <sup>15</sup> 奥西麻由子「粘土細工から彫塑教育への転換に関する歴史的研究—明治・大正・昭和初期の彫塑教育に焦点を当てて—」『美術教育学：美術科教育学界誌』28号、2007年、pp.117-129.
- <sup>16</sup> 石井鶴三関連資料のうち、書簡の整理については、信州大学人文学部の松本和也准教授を中心としてその全体的な整理が進められている。整理の方針などについては、松本和也「石井鶴三宛書簡の整理をはじめて—挿絵(画家)から近代文学・出版(研究)を考えなおすために」『信州大学附属図書館研究』第1号、2012年、pp.21-39に詳しい。本調査にあたっては、松本氏のグループによって作成された書簡のデータベースを利用させていただいた。
- <sup>17</sup> 『石井鶴三全集』2巻、pp.484-485
- <sup>18</sup> 同上、pp.486-489
- <sup>19</sup> 同上、p.490